冬

中村俊定文庫
文庫 18
536
4

# 誹諧古今句鑑　冬之部

立冬

眼ゐ見えて冬ハ立ぬ雲はなら　意朔

冬そ来ぬ降る子ゐ雨の新法師　羅人

小春　小六月

昼中ゐ一時ゐ小春ゐ南　理然

何を指定年小春九日の朧万立
夢の小学子入る小英かな百童
不二見せて日八入る竜小六月宝馬
数尋て抑志孔明小春立乙外
定めなき紀元や小春乃色雖月
夕立ふるやすの糸は小六月丸室

## 神の旅　神乃留守

陸奥国ふ戸立也神堂月其角

旅衣今やはしめは神の旅　呉朝
落葉してさなの長廣神の留守　佐国
朝風ふ造酒屋やめくや神の旅　市仙

## 時雨

足とやはしめ雨やはる乃先走る　貞徳
一夕雨又降りて日和哉　露沾
初しぐれ横も小義を保ち也　芭蕉
天地の性やゆるしたをれ引　湖春

書のねもかいたくろひぬ初時雨　去来

きくとも先ふたほくるしけるるかな

小夜しぐれ蘆の白ハ捲やゝぬ　野坡

けよ竹ゑ蘆へ這入傘の苔　嵐蘭

たくゝしや思ふたむ京の恵物ゑ　化兆

千網ふ入日染ゆくしぐれけく　来山

竹ゑ思ふなるハ何〳〵巻才麿

頃日の垣乃結めやたけしく巻　野坡

あきまきけと竹ゑまるの垣の捲れ声　也角

食堂ふ者時〳〵ゑ〳〵しぐれ　支考

耳かゆく耳ふ巻ゆき竹ゑ　一晶

竹ゑもり雪れ皆ふなへ酒の　烟撤士

池の星又ゑゑ〳〵と竹ゑのふ　北枝

其某の濡父買をむ初しぐれ　乙由

たくゝしや拙て初るき小松原　心祇

何人の戸を坐所を小夜しぐれ　蓮之

三日月乃立ふよりそれ竹ゑ　希因

影〳〵や竹ゑ井の洗ひ馬　洛く

蝋燭の巻ゑる言ふ小夜竹雨　春来

去思し降ぬたくれの口乃星ゑ

荒やむハ風も少くなれ一しきれ　羅人

如降れる雨又ぬるなし神なみ　京　移竹

賣り石のもうれる初時雨　佐保丸

片時雨小春の名を添うけぬ　蒼狐

しぐるれや川きせこゝの橋　佐保丸

たくもやたゝまし　新　松一木　梅部

松風や時雨よ乾く　濡佛

風の恐ゝやすむ小萩しきれ　貞知

新口の祝儀をとゝや時雨きめ　貞川

月花の静る時やたゝれたる　公曳

いそぐハ時むし時雨の迫ひ　傘　其葉

もゝ日小弧ふるやゝ初しくれ　純亮

松風ハ時雨を待ふしくれる　呉言

時雨ふる野川や水の足ゝ張き　吐鳳

たくゝゝ萱かけし時雨の古　孤舟

湯ゝの旅庵ゝ初しくれ　笠歌

猫も膝小少身さて小萩時雨　百桂

をゝ降るたゝれや風の礼きを

木の葉ふれ禁の里や山時雨

山寺や長れ時雨の九ひと日　群長

常ふのむ　浩茶　乳も　夕ぬる　沾涼

志くれまり　秋や　秋もしの　月ふる　佐國

金ふよ　秋て　吉孫　しや　小夜　霰　何来

月と　合ふ　竹雨　も又　ふ　富士の　裾　宝馬

明　初　乳て　山月　ふる　時　面　うれ　津富

旅行

やとまこと　ふれ　月　いふる　ぬ　時　面　梅翁

遊女西賛

所ふ　書　車　望ふ　ふ　よ　小　板　時　雨　田室

眺望

志くふや　筑地の　清　堂　浦おし　蒼狐

しくふや　雲の　陽　干の　安房上総　玉園

炉開　炉口切

口切ふ　塊の　底　ぬ　ふ　ふ　き　芭蕉

炉ふ　友や　額ふ　かけふる　公　面　月下

口切や　ぬ　ふ　ふ　内　義　ぬ　小　ふ　紀　春来

口きりや　ふ　ふ　ぬ　京　ふ　ふ　鯉　清泉

口切や　き　ぬ　ふ　ハ　ふ　ふ　ハ　ふ　公　曳

炉の炭のひとをは猿嫌や肘まくら　投静
炉ぬりきや古な客ふり亭をふる　蛙色
炉宛や蜆三つ二つ　なるまき　釜乙外
口切や茶もるをとりぬ皆小　存義

玄猪

警うぬねのこかるとや祝うう多　存義
住つをは閑もるの子れもち月盃　蛙色



## 逢摩忌

逢摩忌や皆めうまれて祝小若万立
遠広忌や癖小茶の我悟小知

## 十夜

爺婆の京小も多き十夜ず乙由
一夜ゆく十面ハさゆる月夜ず蓑狐
光やうふ祝の少やる十夜うお宝馬

入相の人や呼らん　十夜　孤窓舟

## 帰花

世の中ハ絶て桜やかへ咲　花孔也
みよし野や余江の春かとゝはむ　千代尼
春ゆくゝ雲やむらゝかくり　苍五簾
源山木や覚束なくも帰る　窓舟
ちる中ハ咲てそむもとゝ　枝静

楊貴妃賛

花梨の伊ゝ　やかゝ垂ハ　ハ武雄　緑

## 寒梅　室咲

室の内ハ咲やこの花　冬〻　羅春郎
冬〻の梅雀家　嘯や夕日を　涼山
麹ハそ花ハ加減やむろ桜　芦英
室梅や年ゆくこゝハ雪の兄　寛之
寒梅やハ山ゆくハ花ハ猪　木丹
室梅ハ芳ゆる室さや　旭　彩松架

山茶花

山茶花や小雨小夜の唐四更　梅壽
山茶花やそろそろ寒ふとは　吐風
さんさや挑ハ栗〳〵栗ハ淡〳〵　祖德

茶花

茶の花や蝶の羽ぬけ曙うさ　殘笛
むさけと淋しきと茶の花哀ふ山幾

達摩忌

達摩忌や皆ゐまれて赤ハ花　万立
達摩忌や痩ハ芸の我　悟小知

十夜

爺婆の京ハ毛多き十夜ふ　乙由
一夜〳〵十夜ハさゆる月夜ふ　蒼狐
花やうハ沁ハ少ゆる十夜うる　宝馬

入相の人や呼らん　十夜　沾徳舟

## 桜花

世の中ハ絶て桜やかゝる花　秋也
みよし野や余ほの春かとゝなむ　千代尼
春ゆゑめ去やむしろふかゝり苔　左簾
除山木や見未なくし桜　宝舟
ちる中ハ咲り咲てそむしろ　校禅
楊貴妃賛

きゝ菜や古紫衣をはとひ　咲如竜

## 麦蒔の二葉

麦蒔や一うねハ又むふ　風乙
麦をうかゝふ麦の二葉　北乙　外

## 大根引

ほゝくゝと息吉川や大根引　路仲

老山を腹ふ清らと　大根ひき　蒼狐
大根引うしろへあまるかゞい
兵もものよゝくとこゝろる士大根千外
百姓の居合腰ぶり　大根引ト人
地と人のカゝゝゝゝや　大根引毒水

## 木枯

木がらしの果も香々油の香　言水
こゝゝゝや仲々と寒き山のきゝ　乎角

風小二日の月北吹　ち　乎　氣　福　兮
こがゝゝゝの一日吹て居りふ　ゝ　ゝ　涼　菟
嵐木ゝゝゝゝゝ蓋ものの蔭ゝ幸　芝　子　英
去がゝゝゝや大津八町　年　乃　庭　田　宮
木がゝゝゝや猶神琴て松えこゝ　左　簾
こゝゝしや京ふ海る事とおもはれ　蝶　夢
大きゝゝゝや御ふ與のさめる声　松　架
風のふくや吹井の田宿乃　脛　雪　高
こがゝゝゝれカや佳きて落　暮　教　我
木がゝゝゝやあゝふ昭き落き　春　田　機

落葉　冬木立

おもひなし木の葉ちる頃は星乃数　沾徳
かゝひなる三井の二王や冬木立　其角
冬木立いらめしやな山乃青さまひ　仙化
ふる川やこの葉ハ焼き炭は岡　惟然
山川ふ風のかけゆ　蔦葉　この那　蒼柳
蔦葉焚家や淺黄に夕くふ　い
ちりて水ぬ斗の指　なし　渭北
仙人の影もやつまし　蔦葉　涼山

時時ふおの巻と蔦葉この葉　素芳
神垣ふ張杏一本乃おち葉ふる　素竹
年月もふるゆく屋根の木乃葉　井風
けふ楊蔦葉も風乃八重ひとく　笠歌
蔦垣ふ添ふや蔦葉　まかる芝水
禁書も荒ふ社地の蔦葉　仙里
門の戸乃涼くもなる蔦葉　群長
山乃井の影もかゝちもおち葉　孤舟
蔦葉して或日ふりぬうゝ乃巻　存義
あゝハ也今ハ古城乃冬木立　玉圃

ある寺にて

百年の余を経の蔦葉かな　芭蕉

即身成佛

果ハ皆佛の道ふ為　柴のな蓮之

## 枯野　枯

我丈ふ面くものなき枯野哉　不角

ゐる方ハ莖為てあれ枯堂哉　子堂

川筋のまをくも曲る枯野ふ岩泉

いろ〳〵の菓一父ふ　枯ゑ　ゝゝ　柳水

吹さらす旭大きし　枯野　京　宗瑞

淋しさや枯ゆと馬の親子連　蔡狐

茂るち八淋しきものを枯　葉心　祇

枯々な野中の石ハ黒きを　佐保九

詩の背乃夕日ふ言し　枯ゆ　京　梁山

川幅の砂ふ成ゆく枯野ふ　梅寿

枯ゆ　ふ夕日ふ通すなな礼家　花菱

川ふ枯ふ花や冬路の菓書し　其礼

堂ハ枯て富士のさうと成ふ　百　百桂

枯野路やいつこ御里の夕烏　群長（言清）
迹みの居り所なれ枯野哉　一紅
山居の隠士を憐む
枯藪何くふまいと住な世や　五梁

## 水涸

冬川や筏の居る草の原　其角
水かきて忘れや橋の添はしら　平砂
氷るへきみさへ絶し冬田哉　左藻

## 水鳥　鴨　鴛鴦

鴨の脚ハなれもあへぬみち哉　梅翁
鴨啼や侶と離れて芽一詰　子圭
淮家其裏ハ塗切池乃鴨　宝堂
鴨飛ふやかしおくれて妻の声　春来
足る事よ千尋の上も鴨乃足　蒼拙
水鳥や入乱きてとも夫婦はゝゝ
古く四五羽鴨と見えけり星明りゝ

暮しさくらき森や池の鶯は中　梁山
水鳥よ汐ハ干ぬ游きふる吐風
そ多や初羽ゝり水のなやゝ
ゐ多や森教ハえぬ朝機嫌素盈
持立すは和も寒しの暮のたや存義
ゐ鳥や水かきくの田乃稲株菱雨
水多や多ふ淪とかく朝は和玉園
そ多やゝみゝ粉ふ川高きゝ
水多のうき祢遠ふやはのうね百往
古池ふかゝゝぬ井や鶯蕾ひト人

並松や月ふ紫紙のむゝふ多ゝ芙仙
はふよ行る波英しや朝ふ多末道
月しゝやはの淡詠乃しゝ歯御井風
埋ミ失も耳出せ英ゆ社寺ふ多折臺
入月ふ皆ゝ望ゝ乃千多ゝ引常路
夜垢くむ浦や松風村ちゝ遊橋
淀鳥羽や舟乃絶宮社川千鳥素與

懐旧

かゝへてハ見ぬを時や友ちゝ　乙由

## 綱代

恵心寺に奉公ハせて綱代守　支考
風引ぬ人のゆこころや綱代哉　古紀逸
寒さ捨し綱代の床やかゝ法利　亀文
ゆ寒し夢いむまふとあ丶ろ哉　雀舟
見なゝくと子と伽ふ丸綱代守　在情

## 鮟鱇

鮟鱇や板の間まての富士太鼓　白雲
鮟鱇の片眼ちや滝の壱和水
安へかうや丸龍の昇る水京色　百萬

## 河豚

なゝくは又頃日や姥くと汁　白匂
あゝ何よりもなきみよハるて鮟汁芭蕉
鉄炮の支と寄くや河豚汁其角
ゆを切ていよく悟し鮟の面丶

鮟汁や答ぬたゞけとふゑ子ゞけ　加賀　一洞

ふく汁や一疎入して福　生兎士

鮟汁ふ誠の友や禍ゝもと　春来

肥さ為を包むやふくの蔕衣　万立

来さうゞゞ夫牧中こゝの豚汁　来水

旅やう机ものと見て来ふくゝ汁　蒼狐

河豚汁やもらして更行　秋北雪　春郊

ふくゝ答よてさゝゝろ知ぬ九春ふ　貞知

人ハ武士くハぬも強しゝの豚汁　吐風

玉乃緒よたくゝハ多てね鮟の味　北平

鮟提て子ハ出まする情さ　ふ存義

河豚さげて心と人ふかくさゝら　百菴

鮟汁ふ戸の沖ふあ夜ふ夜の月　狂舟

鮟く汁ふ向ふ礼義　やや大胡　坐雀郎

生海鼠

生なうらむとりふおる生海鼠ふ芭蕉

大きゝと答ふ寒さも掴のるまゝ　ふ万古

恵比須講　誓文拂

先鯛と芋とを恵比須講史邦
兼小束ハ町人ふなり云ひて 海貞佐
賣買ふる元十月廿日 仲旧室
ふ祝のうを従ハなし 恵比須かう心祖
鯛ハ魚の富貴るもの恵比須 呉龍
商人の今年月の出や羽名ひて 素芳
かうる月空誓文の 法祝せむ 五蓮

冬　日冬夜

枯野一流一雲まなく冬の雨 芭蕉
待めきいふつけてし京北山 鬼貫
賜のゐる中の枝よかゝ月嵐雪
狼の吼枯しさ元冬北山 水花
手の徒夜長の犬北叫ふがコ 詠
夜々明る灯も盗ゝ枯め出一つ 梅郊
冬枯や眼ふさゐるその仲の舟 春郊
悟ふ夜アれ辛さや峯の松 玉圃

冬月

一葉ちるいくつも寄て月夜かな　嵐雪

行燈の影振ひける月さむし　一

庵の影尖りて寒き月夜かな　洒堂

淺漬の大根洗ふ月寒かな　俊似

月寒くまるや時雨の入に斜　梅郎

ゆくへなる月よもすがら春の花　春郎

淋きさゆる月和かな　公曳

落葉して心寒うなる月夜かな　素堂

夫夜中や寒ひえ初る月の光　津宜

朱うるしは藝ひとつうるき月夜かな　宝馬

搭ちこの戸も思ふ寒れ月乙外

寒ハ寒と思まさる月や野の寒　袁得

相抑ゆ月て形まむ月夜かな　常仙

寒

寒月の寒ふかれゆく空うな　鬼貫

葱白く洗ひ上るる宝一の水　芭蕉

陸鋼の歯くきも宝〳〵魚の骨丶
歯切ふりむけくき宝一の水去来

乃掛ふ多賀の名居の宝ず尚白

所家ふ陽子かけ去る宝一の水桂之

奥座の志れぬ宝さやあの名歌川

宝〳〵れハ春〳〵来ぬ家ねハ花宝し支考

鳥角子の鞘ゆりう宝し古屋登可生

日と詰て魚荷の通る宝一つ水雅郎

水潤て柳さーくきさむけ一つ水呉仙

沖流て苔なき風の宝一の水寝乗

むさ〳〵ぬかの入詰れ宝ず山蟻

歯乃のさ〳〵に宝れ宝れ素人

## 冬籠

金屏の松ハ古ひや冬ごもり芭蕉

冬古宝ごと又嵩ハ宝ハむけ柱丶

大根とふ味方あり冬籠蓮之

矢屏風の尖りて宝し冬籠古絶逸

兼好もしぬ世の友や冬籠　木丹

さくや此火弾一揃冬ごもり　鯉賜

冬籠出しも　演九郎　一の宮　雖月

春霞とはて北羽ふ度節を引むすを思ふ

降とまちきまるを松の冬こもり　淡く

辞世の句ちとそれおこせ人へ

老ぬとて捨るな梅の冬籠　心祖

## 埋火　火桶　搨

火桶抱て腮脇とかくしの冬ゆ　古絡通

埋火ふ年ふる孫のちいさけよ　寒和

寒添ふやひとりの一禁の相火桶　古濠

抱て知き親の遺アの相火をけ　常路

搨の火ふ寒るや古木北老ゥ賜　百柱

前うしろ何ゴとや火桶の捏うろ　春義

搨林火や春ふハなる百山のむノ　花暨

六蓋

埋火や灰ふなるをおもふ　幸　笠缺

火燵

行燈の炎ゆらぐ戸辺火燵　芭蕉

ほくしめや巨燵まのあたり春澄

いつとなく我が定る火燵うち字先

うきうき庶やさ冷て巨燵の山つゝ花雪

邦子て業俳や火燵の切炉沽涼

西賛

筍井肩向ひ合ふる古きつゝ亀文

炭

白炭や焼のぬむうの皇の枝忠知

炭焼のひとりをあるん竈ノ隙其角

炭かはや雪ハおきれの繁よのミ素芹

炭竈や木を伐るとゝ山燒き玉園

蒲團　衾

蒲團忘て厚きる姿や東　山嵐雪

仙半も麻へをなる　弐　　合衣　小春

四布五布　うのかくれ家のぬとんが　荷義

親　子の哭し　ねらく　浦　雪　うの　青芝

子や焙ひ　ゑも　係れ　家の伊達　浦　雪　宝馬

## 紙衣

寄もかす　香もるし　年とふ　れ　袋の　衣　可著

敝ゑ　ゑ　敝　とかさ　ゑし　袋　袋が　亀文

紙衣　俳ふ　寄も　雪　さの　ゑ　めが　呉言

老の波　立　居ふ　裂る　かこ　子　うな　左蘭

紙衣　着て　猫ふ　油ふ　ふ　ゑ　ゑ　ぬ　袋や　笠林

鈴　百ふ　備る　人ゑ　達て

形こ　衣　着て　芝やく　祝れ　蓑　の　孔　寂郎

## 頭巾

さは　き　る　形巾や　さ　ます　袋の　蓑　如春

逢　れ　ハ　形と　形す　投　形　巾　沾徳

仏巾　ゑ　ゑ　身　衣　出す　や　夜の　寄　野坡

山里や蚊帳うるさき人もなし　京　観水

いろくの蚊帳は果てはた蚊帳　蓮之

よい言を実てしもとるよ投蚊帳　清泉

年なれや人も少くて金次帳　貞川

世の中よ開なる蚊帳たゝきん　北平

ふーさのむうしん人は角蚊帳　雲風

蚊帳ぬる夜は君りや寒さうな　玉圃

画賛

赤信ゝまゝ志ころあるた蚊帳　雀郎

霜

月ふるひもてゆく霜たゝら　京　永定

霜の羽川棟の実の赤きうら　杜園

枝ゝは美いもなる夜は　霜　蘭畝

初霜や茶園蓋原相ほうけ　野坡

そつ霜やうかひとし麻の足い

投牡の鼻息荒き　霜　夜叉春来

初霜や岩ふ不動の瓜そは遠　栄仲

初霜や鳥居の笠木岩の角　雅郊

玉滝〳〵雲のふる井の相糸里　新舟
まゝ起ぬ家の荒れや屋根の雪　宝馬
初雪や屋ハうつとも蛙　竹蓋洋富
あさやうふ雲〳〵日和の雲はら芝水
枯行や野ハ茅蓋の霜の袖　容郎
新天ふ大さゝ笠くしも夜ふ何ふ
月と地ふ金雲白く敷てぬ　亀洞
撲雲や常節ちらむ麦の雲　素月
望籠の戸〳〵戸上ふる稽の霜　壺仙

辞世

霜月や戸なるハなき身の新法師　忠知

鐘馗賛

世の蕎を祇る雲の鍬ふ旧室

羈旅

拾て知る雲雲雲夜の柄伽春来

師翁旧室五十日の法莚ふ人〳〵会ぬ〳〵仕りて

公明〳〵いさむや雲の月ぬる　祝蒼狐

新宅

新〳〵や雲ふ常盤の庭樹上素后

## 雪

雪のふる一夜に出来る雪の山　貞徳

烟にも煙けぶる白し富士の雪　徳元

むらしぐれ雪ふるうらの不尽の山

何と見ても雪かと黒き物もなし

降るゝ雪翁や雪の庵男　幽山

岩角もむつくとなるや雪の俤　其角

姥松の帷子雪や伊達髪　其角

いさらゝは雪見ふるぬ下まて　芭蕉



馬をさ頭る雪の旦の那

恋くといへや雪の門去来

九重ふ見訓ぬ雪れ夢さかい

つの雪白と鹽の苦くるる嵐雪

雪打や白出蔵る木葉　才麿

雪の雪や先厩うきえ初る　許六

雪の中蔵やう墨るうつしぬ　猿雖

降雪ふ北大きうろ不見の山　智月

初雪や老やしやせハ判宮を秋色

曙や井角の雪ふ神のあと　雪詞

初雪や赤子小足を抱朝　其角

雪の日や紅梅の蕾の色　〃

花咲や雪降るなる　芭蕉　俳諧吟

物陰の降ぬも雪　れひとつ　松芳

ちらくと夜も明六つのむこだ　一通

かさなるや雪の山　山の山　加生

ほろ〳〵と雪の山　山も　仏　一井

雪ぬるや杉ハ杉ふる　て雪なるら　西坡

玉簾雪ちく初の谷ふる　隆志

ちつ雪やゝ散れて仕まふ笹の雪　木因

初雪や先茶屋まで　隆　まで　路通

笠の戸や夜の百ふる我と雪ハ客　丈艸

所も山も雪ふる化て何もなし　〃

雪ふる戸先ハ休めハ皆やそむ　孤食

這入さい不や雪の庵　折戸　柳吹

下るかさ〳〵ふるハ雪ハ　ばく也雪の人　素峨

初雪や袖笠なとハ人ハ　器　超彼

ちつ雪や彼の石ふる岩の上　淺く

其雪の蔦ふる家や谷の雪　丁　光

半分ハ江戸のもちふる富士ハ雪　古　立志

初雪や多賀ふる春の新春来
たり雪や柱木車の途中より旧室
炭しさも偽りものや雪の泉心祇
初雪やせめて卯月の似せる花い
たつりやきみふ越ひし東山乾什
酒屋を兵ひとつ雪宋阿
初雪や我孤しき傘北下米仲
そば雪や稲の古株ゑ〻て蔡柄
初雪や除月迫〻十二月い
積るか日本橋雪の雪い



ち〻雪や眼ふ稲んうな川向ひい
富士をう見ゆるハ雪のかおい
雪こう〻寺子ゥ首と成よ急い
雪〻ゆ〻戸さしても雪の花ぬ栗堂
いほ法の元解ひ〻柱の雪い
起あて〻老の叶夜や庭の雪い
入相や雪のたつ巷家次津梅郎
黒紀元の淋〻雪見舟亀文
枯残る人目な〻〻雪見舟亀文
捨舟やをて〻も雪て横教雪い

初雪やたつまのいなは山　貞知

雲よりも白く仰ぐ御世の雪

ちらほらと限りをしらぬ雪

初雪やトル花奇葉　京の名雅郊

雪ふれて一節ゆかしや竹の上　孫山

たつ雪や故郷の字事を世心寛藻

ふる雪や鞍馬一諾川通ひ

ちらほら雪や白つれて蒼る波の帳素藻

初ゆきや都の不二のうきハシ　龍昇

眼よたつと西戸きしむやけさの雪　花城

初雪やおのうへの梨子地　沈東

夜ゆふ来る牛ふ行くは水雪曳尾

雪雲や荒て黒うし銀閣寺　北平

降雪の枝よりちくむやちるも雪　頃翁

初雪ふうとく月ハなき也　吐鳳

大佛の俊なお都やりの恵百萬

雪一木夜ゆ初雪　玉と光ぬ　笠齋

ちらほら雪や何ゆ降て山ゆ　物宝馬

降雪や公理もう　たなき　菴津富

夜半の雪明るは雪と雪くとる　秋方

武蔵野の雪や足ためむ陰もなし　素人
鶏と犬と隣と雪の岸の雪　雅德
雪の月や紫色たる孤の静こころ　羽貫
足て笑へ雪れ羽森も竹ゝの月皓
初雪や空清き雲消ゝ雪素涼
雪の月と淺山や雪の朝　芝水
藤川小野の毛氏や雪降れ拙水
雪川雪や旭の邪亡ゝ雪素角
初雪ゝ晴ゆく路ゝ落雪い
乙雪やかゆい所へ雪の面き蒼雨



雪氏末ゝ我歩ゝしれ風情ゝ乙外
ゝ雪や花の外ゝ雪ゝの山狐丹
大佛雪や乱ゝき小笹京十教
雪絶ゝ孫の雪となる夜の毛素山
ゝ雪や月小ゝめ雪ゝ氏如雷
初雪や夜柴小たゝ杉葉ゝ雀丹
夜の雪石灯籠ハ物さび　や道橋
盛り小笹行道小雪の花婆石
雪乃日や雨ゝ降雨の失れ雪さ沾涼
降かく世雪小嵐の竹　筆鯉弥

雪一面振はけハ我足の跡 雀郎

ゆきそ〻ぐ下戸なゝめなる世 何来

畑の雪大根の葉ゑ見せかゝり 軽舟

信章 江戸より登るゝか

いや見せ―不見を見ると眼か日枝の雪 李吟

立能徊

初雪や内か居さゝれ人ハ誰其角

許六ゝ竹の西か見して

叶君のおもゝろい話雪も炉を巡る 士

舟中

指形小雪の木口と見せよゝり 沾峩

雪後

志ゝ雪や晴て月のゝ夜に その百童

吹雪

歳吹雪浸くや牛の反ちゝみ 芝水

旅僧をとめて

なゝめとゑ梅さゝゝ炭松の雪 雀郎

妻小疋ゝゝくと笑して

衣白髪をとゝ雪ゆきの松一巴

霞

霞ふる春や初食の出来る色　畫好
志ゝく と子ハ肌ふたく霞の奇　扶色
雪ふる日も陣まきる　霞　千外
なら茶ふ宝ちと通す　霞　風

霧

いろ〻に春や雲の拵　末笠　芭蕉

むさゝびや不尽の雲のこけ　正雪
きよらとして霧ふらぬ麻の角　支考
さゝくと蕨も氷をあられ　史邦
萱菅やなら〻雲の降とまる　呉朝
泣きぬるは私のきれあるを　梅寿
地よ蔭く春とうもきき霧　市仙

氷柱

吹結て尖る形ばかりのたらぶ　玉圃

大滝のとつまと望る住らく　武津富

## 氷

ゝとゝ人ハ夜を森ぬゝや初氷　心祖
夜アや雨明て楼の柔ハ　お寛藻
朝烏氷の上と歩行けアと　素藻
残はめぬ陽や小春の蔭　水婆百
月小徒砲も品弱も氷る垂やゝ雉
残月やゝゝと出くたつお雪高

氷る温ゝの笹アこの邪　玉園
お井アは地小泣しき雨なの月　孤舟
水ひとゝを　おるや川の　緑白亀
凍る夜や飯と書へき　祝まて　雉口

## 神迎

松ゝき雪も情めや神　むゝ　栗堂
おのつゝ来も張ハーや　祢　巫　曳尾

冬至

日八牛ふ百かへらる冬至ゆら羅人
麦の芽や冬至の日脚一分二分五厘
冬もてや梅ふ交れ日脚一寸宝馬

新足世

新年や四二十町　明乃妻宋阿
茶屋くも新足世新年や軒の玄心

新年や人のこゝろはかつ足花沾峩
かふ足世や稀数ふ灯を数富百萬
新足をや暮ゝぬ清　法見物杜谷
点足せや一番太鼓　二ま　鶴老鼠

髪　歯　袴　着

髪を生や俗ふ生る子ハ生つ足えに蓑狐
かみ歯や俵茨巾の供男春郊
ま多見や父ふ似初るうしろ附　吳夕

神楽

少きゝぬ歌を妙世神く楽　播州　利重

夜神乎や梟息　白な面の内其角

古きよそよるの鼓や神く乎素玉

美神乎や庭燎ふる杉の丈津富

一

鞍馬講

平等ふるせる檜やお雲月梅翁

肩衣や後の世かけてお素月　大坂　旨恕

望きゝぬ老の力なれやお越范字

花地流の唱へ初々むれ諸風素雅

助ゝ後世やけ世ふ情石越操舟

鈴打

青を也曉かけて神く　平野　宗静

今ふし年ゝ尺さ神叩嵐雪

其古き瓢箪尺せよ神叩公来

瓢簞ハ酒ハ入れぬ器許たてき轍士
夫婦さ我歯ぬけ多なる祢叩芦賣
人うをハいろけ彼さ我祢ゝ紀竜士
駕籠よけよ朱雀の書と祢敬洋富
ゝとてハ見ぬ安や祢多冥宝馬

宝の入

鼻の先住まんても知恵宝入吐風
大家へ笑ひるるや梅のもな芦共

寒念佛

仏の教ハ撞木ハ細し宝念佛文考
雪きを里ゝ紅ゝ不ゝ宝念仏心祖
出住節の琴の男や寒念佛石絲
芝の巴ハ千住ハ八つ宝孫ゝ百萬
宝念仏いゝ浮世ハうしの付如雷
夏ゝくや訓傑の祖ゝ宝念仏風舎

立春

時鳥春きへうて宵の中貞德
宵春や皆女房と拾ぬ人遊也
宵声やれちらるる人乃不幸佐
寒春のはれ中を月表式百萬

煤掃

年なくや耳かさるて煤ちらひ友静

煤ちらひさるものゝ中ゝ拾ひ扣風
煤ちらく寺ハ自出ちれ佛りか不卜
ちらく掃や嵐庭こむ莫揚の中殘香
煤ちれや囲炉祀ふくるる庵かゝ李由
何方ふ行て遊ハむ煤ほうひ拳白
大晦の日なこ不ろ煤拂乙由
叶日ちら陸かちむ煤ちれ宗瑞
煤ちて夕暮ひちる静也荼孤
萩とこめて煤ちく時代の城下町寛雅
煤竹やちく又宗の月左簾

燥とて皆〻く之をきき　拉　式不言
ちゝたきや藝ふまする紙合　羽雀即
燥て紀の芳を抑子や礼を鶏　李克
さゝなをと夜ハ明ヶ亀　燥　拂　鐘下

佛名

佛名ふ雪や元井のかつけ　衍　安　成
ちき春ふ新めて到を佛名　九　宝

餅搗

餅花や糸もてぬける　玉　抑　大坂　助　音
ちち搗や元揚陸めしも来つき　夏　蒼　狐
餅ほきやてんゝふ湯家代豆まろめ　把　菜

年忘

令を洗濯を也とうしはて　孔　野　坡
年忘を美を美坦蔵て　亀　京　升　亭

蛩小耳あゝハ引出せ年忘迄　亀文
浮俳やむとして年を忘貝　丶
年ゝまれさまや老ぬ茶酒素玉

節季ね

糸もくや節季いはる夕ひか字先
節季ゝは小相仮てやく成ゝ魚宗瑞
節季ゝの己と表く拓子か紀亮

混合

女房巻洞むや素の寒の後迄　風虎
やもかくをなてやこの枯尾花　くせ城
令世又肥遁きと藁くひ不門
惰まれてなかゝる人冬の幅元角
今ハ世城秋くきや冬の墜且藁
陽婆とハおもれ思ゝ祇の猫寄吟
医ゝゝ乃寒森松やせ寒俩吳夕
空ゝ一白ゝて暑ゝ蟐の水五連

降るふるぬ雨や清る花八重花菱
殘る日や蔦紅葉の森小芋一木一巴
ぢ今講八佛小花のちくに式曳尾
餘一の谷引揚る濱子人の墨北平
石藤さくや加茂きる水沛風舎
あさめて友と後さむ鶏卵酒李克
尊亟の風振とめ川ふこ船操舟
笑きふぬ恋の笠紙や恵撞し外
子行心丁子沢も新ふ世や貫太
心斗揺小汐満まるや苣菜漬呑鳥



旧室惟
水沛や扒のうへ小少くめかり 蔡狐
行脚ゆくこころ
流八や山蹊吹ふ九合羽涼帝

冬雜

水ふとふるるかるあらしず介我
平家蟹
生海嵐ふるるなる源石小平家也 涼菴

老てハ只世とやもくあめるとまろ
生ハ去まれの雪 巾梅郎

市中

初雪の沙汰や頃日葱 苔笠郎

年内立春

よこしなよ師走の内に花の夾心 雅郎
年の内ハ春ハまだ雨の雪 雅郎
やれ内ハ去まち月の夕アず 左簾



節分

豆とまめの中なる矣ひず其角
月花の果や拾ハ赤いこ 柳居
つくふ種植の芭蕉 俊羅人
行と来る年やたえむ除夜の酒 雀舟
耶郭の松えれまなる 松巵言

病後

今年ふ拾り力や年の豆 素芳

歳暮

かへせくわのとしなるハ年の暮　李吟
恐ろしや女の眼境ひとれ雲　信徳
暦ふを皺ハとるとなり年のくれ　一時軒
花雪やまとてまとて夫と行　鬼貫
大三十日定めなき世の定めかな　西雀
行とてもまとてとなるハ　此　ゆとれ　湖春
旅寝の夕日静けし年の暮　其角
山伏の足袋ふ出るれ師走かな　荒壁

年の夜や人ふ足の十とる　玄来
待若め聟ハもなる年のくれ　李由
雪も今周しふるとと師走かな　休甫
寒ふく大味ロの森酒う邪　蚊足
春まれや花を梅とて咲とまる　邦城
いねくと人ユいたれつ年のくき　古渓
渦蓋のけでくくさよ年れ暮　孤屋
行年球師走ふ駆て情ひ　也　蒼狐
年の市ふれハ静なる　ゝ
や低ふ角カ面ゝ

八幡宮古社月夜の大三十日　蒼狐

なつかしき月の栖や大こうら　移竹

伸を聲を師走の中小足送りぬ　梅郊

行とし詫をや夜よの　池　次　栗堂

ゆく年は新ゆるめきると雪の傘ゝ

習ふる今宵やはらゝと惜こ時ゝ

廣庭の日新伸しると菅の冬　雅郊

年の夜や焚火のうしろ鄙の新　寛葉

とい来ハ誰もまゝ也年は菅　吐鳳

行とし蔵玉や玉敲巾花城

月ゝハ室ハ寒まむ大三十日　公曳

市人小年惜ひむ新ハなると　魚ゝ

雪の内小春ハ来よ魚かさと　杖沾我

年末夏ふて体むやむつのむ乃陰　左簾

まゝ小内く年もぬゝと乃　妾津富

迎も行とし空おもと師走大ゝ

不二の雪ちゝけもやして年菅ぬ　雀毋

提燈小迎く年も行新　狐ゝ

物書や人とて春といゝむ玉園

行とを迎ゆく梅乃きかひが　吉波

大朕ふはゆ〜年れ岡角カ煮大
一日の大事目ゐや年れ苦何来
師走家と之ゝむゝや酒の泡平砂
鶏の時年の寿ゝるいくや今笠齋
梅柳解ゐ至春ゝ今来てそ存義
自悔
子ともゝハ歳ゐゝ之年の苦其角
永代拾上
帆はゝらや師走の精の天ゐ也梅郎

誹諧古今句鑑　冬之部終



附録

冬之部

一陽井素外

うゐとゝを小春ゐなるゝぬ花啓
凡雲の深ゝく孔〜初時雨
庶る苦れ人皆祢ゝゐ小夜時雨
かゝ下戸と衣れとおゝ久〜く礼
初ものや炉ゐ次炭の白ゐを
炉〜たて小六月なる十夜ゐ

水仙や掃除面きて庭ごゝし

名仙や朽葉ふ染まぬ公ゝえ

麦落や畔ふ物ふ里の犬

ふこ〳〵や火消てる月夜

風や末ふ〳〵物の加茂河原

こか〳〵し此蔓ふ立む護法神

ふう〳〵や雨も枯きる月の色

淡し此ハ日和ふ猿る落葉ふ

むく鳥の一ゝ序風のホの葉うな

山の井ふ炎ふ〳〵佐の朽葉ふ

小雨して枯人を紀枯野一乱

野ハ枯ぬ不ハく此田ふ売

冬枯や此川の負此庭ふ淀

名名や水と朽ゆくはれ夕ア

森ふ〳〵ぬを南ふく秋の暮の色

暖や千鳥一む光海の息

仮付やなの〳〵ハ光出る網代ち

夕昏の重ふ角あ枯寒ゝのな

秋宅ふ〳〵川ゝ重の立ゝ

今ゝふ命深山の冬ふ上至

毋も妻を欲くむ富や冬籠
糸道々の行くゝ老ぬふ世籠
搗焚や雪乃下ゝを人の国
まるはく蒲雪か意はあてます
胎内ふ我をやとせる蚊とん乃姫
曝ハ乙ゝふ宮をし雪は光
鈍口ふまゝゝ言や霜の朝
角くむや苔枯をて雪ゝら
雪ゝゝや五拓の富貴ハゝゝ菓
ゝゝ俳ゝ雪のゝゝは不老の山

大雪や大うそ月の夜アは室
降雪や六つの地義は油たゝ
積雪危雪ゝのいゝて後夜
雪の五や原ゝゝ五人ゝてゝす
朝地ゝやかけ行雉の雪ふ
老ふふゝ大桶九めて雪の朝
かゝゝと月夜を鳴ゝす氷れ
砂風や塔の氷は石かハら
日し梅をいゝた波ゝ冬玉糸
義ゝ姫をまハす夫ゝ里神楽

春とまて人ふ眼ハなし　梅花

柱木盃ハいり　燈とろ〳〵小柴垣

餅焼きやまゝと重たもき　女釈

ちゝ屋や年し漕ゆく　秋の江

硯も師走かゝちや　筆の数

蓋し龍年も惜まて　美さうと

眼ハ人ふうゝや海老　この　古暦

撞ハまていりハこと　蓋の隆

師走十五日基のうち〳〵ふ

福ハ内いつくを鬼の　此月夜



ゆゝとハほゝきと晋子もいつし
むもめのみとをもゝれやうて

春まりや蓋ふうゝふ花の父母

送別

逐孟とまゝむ　蓋路ふ雪の酒

落髪せし人ゝ句をとられて

阪中茶ゝ比ふ別とハれ　奇特や

師終焉の時

てや氷　泮む一きを拾ひ　法

全瓦居とうりせ日軌の初まれふ

第一ぬる　蓋ハ氷ゝてなうゝとハ

雪中遊與

拾ひさハ庫裏や蕨む　井の雪

禁庭殘菊

明殘る星を雲井の冬の菊

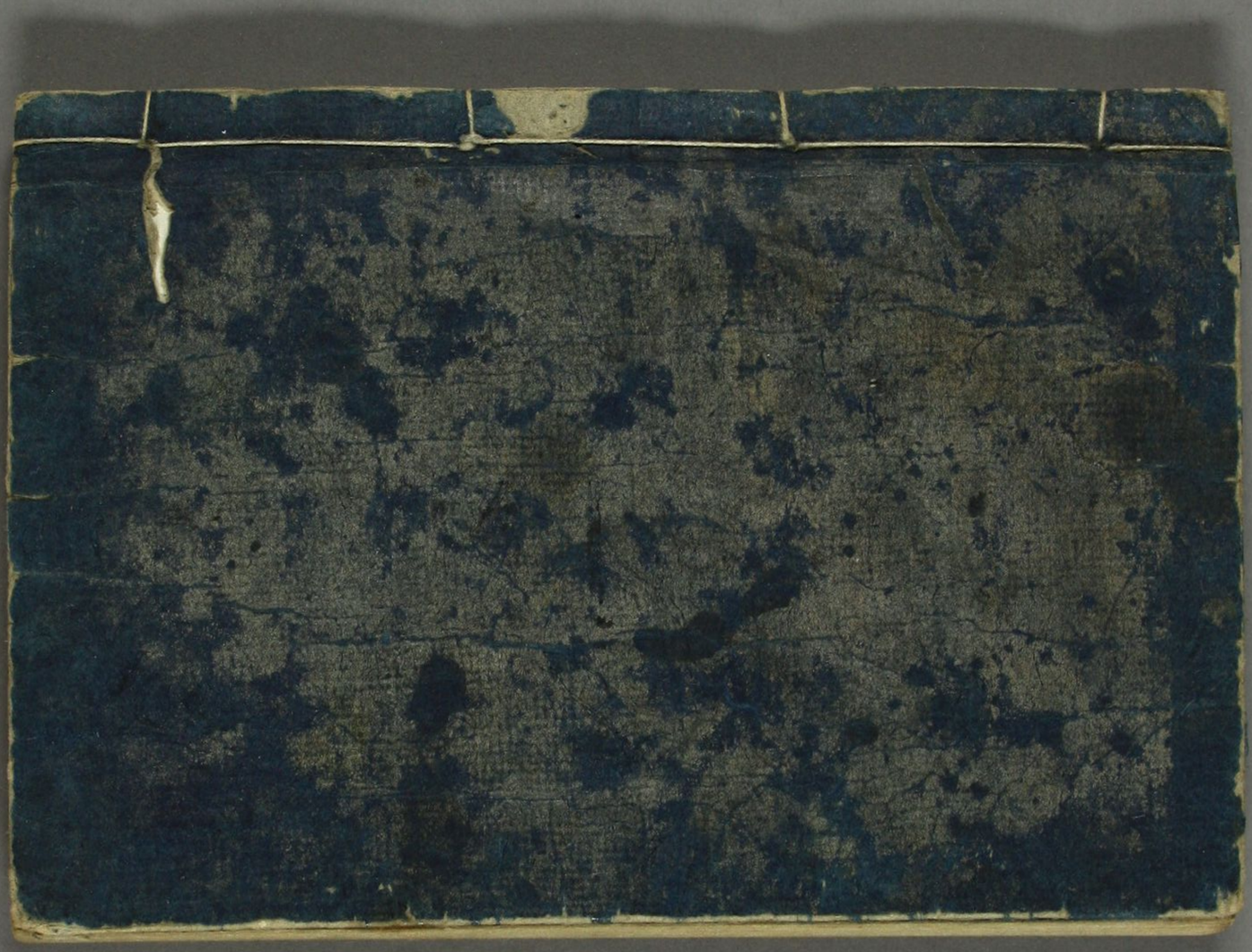
寄冬祝言

君の代ハちゝに古ゝ見ん　松流冬

附録冬之部終

跋

廣韻ハ鑑ハ鏡也又照なり誠也とゝ我師
玉池の翁得る所の明鏡ハ古今其句を照し
ゝ世門生社中其数誠に大意ハ自然委
支ら中ハ親疎の事なり初学の為寒ハ俳句と
挙む親句といふ所也　花とゝ花ゝ花のくと
赤地ゝ　宗祖　疎句といふ所ハ　えゝや神代流
事ゝ出そゝ　守武　ゝこゝく詞の親きと疎き
ゝの儀也ゝ所ゝ　ゝ書ゝ　授書と命す集中ハ
師の句ゝ其由縁とゝふハ此集ゝくいふ所る

人の撰ぶを仏さて増補せらおこの業なるか
縦ふ己の句を撰ぶ入る事乃あるんや寄おも
義を請るものハ一生師の句と準縄を要ハ古況例
をも引て其もむ化とうけむるとて浅さむ
亦我志ふ多人ハ少ふ一ろ年度ふとてまとる銭
筆一あつ兄再ひ少ふ一ぶ兄ハて附録ふ
こ生師の稿ふ加ふ兄撰ふあるける事を
安永丁酉夏常木丹葛飾乃生白菴乃て書

西本釜太郎